

「三年間のきらり」 利尻町立利尻中学校3年 村井 煌翔

僕は利尻に転校してきてから楽しい日々を過ごしている。小学3年生の終わりが近づいた時、親から転校することを知らされて、僕は小学4年生の時に利尻に来た。新しい環境でうまくいけるか不安な時、みんなが話しかけに来てくれたキッカケのおかげで、楽しい日々を過ごせていると思う。

そんな緊張していた小学校を卒業し、中学校に入学した。そんな1年生の時、最初にあった一大イベント体育祭があった。その時はクラスの人数は13人と、先輩のクラスと比べて人数が少なく、学年種目の島渡りではかなり不利でした。しかし、みんなでどこが悪かったかなど自分の意見を発表して、意見で出た悪いところを改善した。みんなが全力をだして目標であった10秒台にすることができた。本番では先輩方に勝つことはできず3位という悔しい思いをしたが、目標を達成したことでみんなの仲がより深くなったり、団結力が付き始めたりしたと思う。そこから2年たった今、最高学年の3年A組になった。長年、学校生活を共に送ってきたおかげで〇〇はきれいに文字を書くことが得意だからメモ係をやらしてもらおう、〇〇はみんなをまとめることができるから、班のリーダーはあいつにしようなど、相手の得意不得意が分かるようになった。そのおかげで最後の学校祭の準備期間の時、出し物は何にするかなどの話し合いが早く終わったり、ダンスを覚えることが苦手な人にダンスが得意な子を付けてあげて支えたりしていた。みんなは当たり前のように助け合っ問題解決していたが、僕は自然と助け合うのが当たり前だと思わない。なぜみんなは当たり前のように助け合うことができるのか。それはみんなのことを大切にしているからだと思う。3年A組は13人という数少ない人数、だが少ない人数だからこそみんなとのかわりが深いため、大切にしようと思える人がいるのではないかと考える。「13人とか少なすぎだろ」と思ったそのあなた。確かに13人はいろんな中学校と比べて数が少ないかもしれないが、その分みんなの個性をたくさん持っていて、輝いていて、まるで30人くらいいるのと同じくらいに感じたりする。

そして、僕は当たり前のように感じていたみんなと楽しく話す日常が好きなのだが、卒業したら、島から出て札幌の高校に行ってしまう人もいる。つまりこの楽しい日常が続くのは卒業するまでの残り4か月くらいしか残ってない。その限られた時間の中でレクリエーションなどのたくさんの楽しい思い出をたくさん作ったりたくさん話をしたりして、思い残さないように卒業したい。